

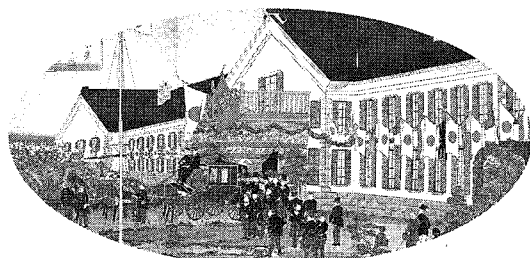
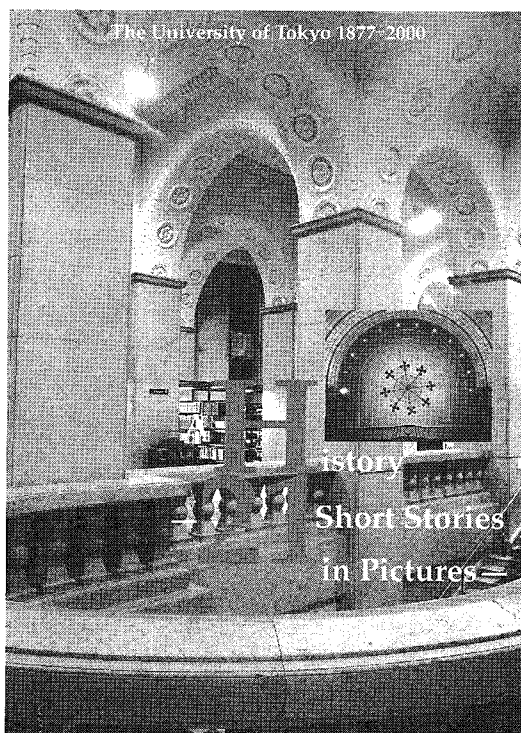
東京大学史料室ニュース

第24号 2000・3・31

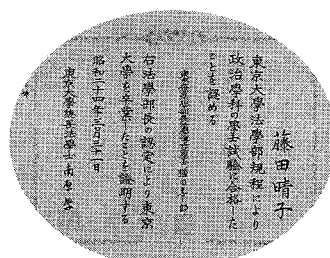
目次

『明治の啓蒙思想家 加藤弘之とその時代』 (斎藤隆夫顕彰会「静思塾」刊) 出版まで……………2	受贈図書一覧……………7
A History-21 Short Stories in Pictures-The University of Tokyo 1877-2000の編集について……………4	史料室日誌抄録……………8

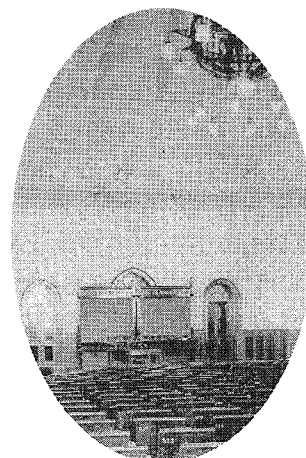
A History-21 Short Stories in Pictures-The University of Tokyo 1877-2000



Wood block print of the opening ceremony for Kaisei-Gakko (1873)



Certificate



Interior of lecture hall

『明治の啓蒙思想家 加藤弘之とその時代』（斎藤隆夫顕彰会「静思塾」刊）出版まで

神戸新聞記者 武田良彦

一八六一年（文久元）四月、アメリカで南北戦争が勃発した。奴隷解放を唱える北軍が勝利し、終結を迎えたのは四年後。勃発の年の暮、日本に、戦争の結果をピタリと予言した論文を書き上げた若者がいた。幕府の蕃書調所教授手伝・加藤誠之。当時二十五歳。後の弘之である。論文の名は「隣草（鄰艸）」。世界の主な国々の政治体制を紹介、日本も憲法を制定し、立憲君主制を導入すべきだとした。立憲思想を体系的に紹介した日本初の著作となった。

天賦人権思想に影響を受けた加藤は、奴隷制度は「天に背く不正義」と断言。北軍を率いるリンコン（リンカーン）は「賢良の人」でもあり、南部は「数年を経ずして」敗れると占った。“正義は勝つ”という単純明快な根拠ながら、結果はその通りになった。

それから八年後の明治二年、新政府の役人（会計裁判事）となっていた加藤は、政府の議会「公議所」に「非人穢多御廃止之議」を提出した。天賦人権思想から賤民とされた人々の解放を訴えた初の建議だった。職務の傍らで天賦人権思想に基づいた『立憲政体略』（明治元年）『真政大意』（同三年）『国体新論』（同八年）などの著作を発表。開国直後の日本に、政治、法律から経済、教育、学校制度など、幅広い西洋の新知識を紹介していた。「明六社」の創立メンバーにもなり、福沢諭吉と並ぶ「啓蒙思想家の双璧」として、著作や言動は、政府の役人から自由民権運動家まで多大な影響を与えた。

ところがである。東大総理在任中の明治十四年十一月、『郵便報知新聞』に、自ら『真政大意』と『国体新論』を絶版にする旨の広告を掲載し、それまでの天賦人権思想を清算してしまう。直前、「明治十四年の政変」が起り、政治のベクトルが、リベラルな英・仏的なものから国家主義的なドイツ的なものに向かい、学術、文化も保守化の波に飲み込まれていく。明治天皇にドイツ語を教えたこともある「ドイツ学」の先駆者は、政府にとって、この上もない逸材だった。これにこたえるべく、加藤は、社会進化論を理論的根拠として、「護国理論の構築」に情熱を傾け、世俗的な栄達の階段を駆け上がっていった。帝国大学総長、貴族院議員、男爵、枢密顧問官、学士院院長…。大正五年、七十九歳で亡くなるまで「官学の巨頭」として君臨した。一方で、論敵からは「政府の提灯持ち」「御用学者」などと痛烈な批判を浴びせられる。

一九八八年七月、兵庫県出石郡出石町は「まちおこし」ブームの中、町所有の加藤の生家を「加藤弘之資料館」として整備するなど、加藤の顕彰方針を固めた。加藤は出石生まれの旧出石藩士。町役場近くに生家が残る。町教育長を中心に、遺品の収集や勉強会な

ども始める計画だった。

それまで、地元における加藤への認識は、「初代東大総長（正しくは総理）を務めたエライ人。この一点に尽きると」と、町の教育関係者から聞いた。生家は、町が誘致した企業の“社宅”として使われ、その入口に「加藤弘之博士生家」の案内板が立つのみだった。いくらか加藤の業績を知る人からも、「保守反動のイメージが拭い難い。顕彰に値する人物なのか」といった疑問の声が出たほど。教育長の急死もあって、結局、計画は立ち消えとなった。

私は兵庫県の地方紙・神戸新聞記者として、八六年、但馬総局（豊岡市）に赴任、出石町も取材エリアとしていた。私は、この顕彰の方針を初めて記事にした。また、学生時代に、日本近現代史を専攻し、加藤の「転向」をテーマにしたゼミに参加していたこともあり、顕彰の立ち消えは、心残りとなった。

本社勤務となっていた九一年、出石の斎藤隆夫顕彰会「静思塾」から、加藤をテーマにした講演依頼を受けた。学生時代の記憶を呼び起こしながら臨んだものの、不勉強さを実感させられただけだった。また、「静思塾」のメンバーから、次のような感想を聞いた。「加藤の評伝は難しく、加藤のどこが偉人なのか良く分からない。官僚的な思想家だったことだけが、印象に残った。もっとやさしい言葉で業績を紹介した本はないものか」。

その評伝とは、田畑忍著『加藤弘之』（吉川弘文館）を指していた。書店で入手可能な加藤の評伝類は、この一冊しかない。「政府の代弁者」「御用学者」という視点が強調され、「どこが偉人なのか分からない」という感想はもっともだと思った。

田畑の綿密な加藤研究がなければ、加藤は歴史の闇に埋もれていたのかもしれない。だが、彼を啓蒙思想家として評価する限り、『国体新論』刊行までの著作、「非人穢多御廃止之議」など、初期の啓蒙活動に、もっと光を当てるべきではないのか。たとえ、初期の著作の中に、国民の啓蒙でなく「政府の啓蒙」的な思想の断片が交じっていても。その上で、「転向」後の、国家主義的思想には、批判を交え紹介すべきなのではないか。それが、私の思いだった。

それならば、自分で評伝を書こうと思い立った。だが、すぐに迷いに襲われた。福沢諭吉や中江兆民に関する、評伝や研究書は刊行され続けているのに対し、加藤の名を冠した近刊書がないのは、現代的意義をもたない人物ゆえのことではないか。再評価して世に問うだけの人物なのか。一般人には、表現として難しい部分があるにしても、田畑、吉田曠二（『加藤弘之の研究』）らの先行研究は、加藤に関する文献・史料

のすべてを既に提示しているのではないか。人間像を浮き彫りにするような新たな史料は存在するのか。

この迷いを払拭すべく、母校の法学部教授だった植手通有先生（日本近代史の研究家で『日本の名著34 加藤弘之 西周』の編者）に、お目にかかった。先生は「日本に初めて本格的な立憲思想を紹介したことなど、功績は計り知れない。現代の人間から顕彰されてしかるべき人物。一般には紹介されていない業績は多く、評伝を書くことは意義がある」と激励して下さった。

このような経緯もあり、初期の開明的な思想を中心に、「転向」後の国家主義的な思想も含め、加藤の生きた時代と生涯を分かりやすく記述することに心掛けた。だが、学術機関に属さない個人が歴史史料を入手する難しさに、すぐに直面することになった。それでも九三年春から、四年間の東京勤務となり、日常詰めていた国会記者会館から国立国会図書館が最寄りだったことなどが幸いした。しかし、ほとんどが二次史料であり、田畑らの研究に網羅されている事柄が大半であった。

新しい事実を盛り込みたい。加藤が残した日記の存在は知っていた。既に、日記の一部は研究書などに引用されていたからだ。合計四十五冊、六千三百三十四ページ分（慶応三年から亡くなった大正五年まで）あるという。東京大学史料室が所蔵していることも分かった。しかし、仮に閲覧が許されたとしても、膨大な量の日記を読解する能力も時間もない。

そんな矢先の九四年、同史料室の中野実氏が、加藤日記を読み取る翻刻作業を進めていることを知った。既に『東京大学史紀要』に、その成果の一部が掲載されていた（92-95年、第十号~十三号の計4回）。加藤に関する最新論文すら、極めてまれな中、地道な基礎史料づくりに取り組む中野氏らに感動を覚えた。

翻刻された日記は、明治十年代の一部だが、それまで知り得なかった興味深い事実を目を見張った。明治十四年の絶版広告には、明記しなかったが絶版にしたとされる『立憲政体略』処分に関する記述や交遊関係など。特に加藤家の金銭の出入りに関する部分は意外性に富む。生涯お国のために論陣を張り、晩年自ら「貧叟」と号した男の懐具合は“チョーリッチ”だった。

年取の詳細な控えから、死んだ娘を埋葬した際の穴掘り代、財テクのため買った土地、借家用に普請した費用など。総理として東大へ出勤途上、「カブト町」で公債や株を売買したといった記述まである。それまでの評伝や、加藤自ら記した自伝類にも、これらの事実は一切ない。金銭に対する几帳面さ、家長としての弘之の顔が浮き彫りにできると、一人ほくそえんだ。

それにしても、なぜ財テクをはじめたのか。また、明治の啓蒙思想家の中で唯一、海外に留学や視察に出かけなかったのはなぜか。加藤の生涯についての疑問点も、その推論を交え本書にまとめた。

日本の近代思想史上においては、過去の思想を清算した行為のみが、クローズアップされ、加藤の「御用学者」「保守反動」像が定着したかに見える。初期の思想は、再検討され評価されるに値するし、「御用学者」に関していえば、政府の政策に追随する「御用学者」と言うより、先導的な「護国理論の構築者」とてもいうべきだろう。

現代的意義を交えた新たな加藤像を浮き彫りにすることには、及ばなかったが、加藤研究のたたき台になればと、出版を決めた。

◇

一枚の写真がある。明治十九年四月、東京・小石川植物園で撮影された。中央で腕組みしているのが加藤。東大総理辞任直後、学生らが謝恩会を開いた。加藤の風貌は仁侠道の“親分”そのものであり、権力に媚びる御用学者の顔ではない。職責を全うした統率者としての自信があふれている。

撮影の三年前、「明治十六年事件」が起こった。東大の卒業式の際、酒を飲んだ在校生らが、大学の施設を壊し、投石するなどして暴れた。警察の捜査に対し、加藤は断固として学生に手を下させず、文部省の追及には、学生を、いったん退学処分にした上で、全員復学させた。自らは辞表を出し、学生を守った。加藤は“慈父”と慕われ、「大学の自治」と、旧帝国大学の「復学」の伝統は、ここに始まったといえる。この記念すべき写真の一部を本書の表紙とした。

注 斎藤隆夫顕彰会「静思塾」 出石町出身で、大正・昭和期、議会人として気骨を示した斎藤隆夫（1870-1949、衆院当選13回、戦後国務大臣）の精神を受け継ぐため、1984年、評論家・草柳大蔵氏（現塾長）の提唱で設立された私塾。講演、異業種交流会などを主催している。同著の問い合わせは同塾〒668-0254 兵庫県出石郡出石町中村 TEL0796・52・5643。303ページ、2千円。



A History - 21 Short Stories in Pictures-The University of Tokyo 1877-2000の編集について

機関・部局等の英語呼称について

英文年譜を編集する？!

史料室では、1997年の東京大学120周年事業の一環として、『年譜 1877-1977-1997』（和文年譜）を編集した。「英文の年譜を編集する」と聞かされたのは、和文の編集が終わってまもなくのことであった。和文年譜を見た総長から、英語版を編集することが提案されたのだという。コンセプトと紙面構成は、基本的には和文年譜のそれを継承するというものであった。この時、他の室員がどう思ったかは定かではないが、私は「和文年譜に書かれたものを英訳すればいいのだろう」程度にしか考えていなかった。

しかし、それが甘い考えだということは、すぐにわかった。

英文年譜の趣旨は、外国人に東京大学の歴史を紹介することであったので、史料室では外国の方に和文年譜に対する意見を聞く機会をもった。この時、年譜中心の構成の見直し（ストーリーの必要性）、日本文化と東京大学の関係や卒業生などの東大関係者の紹介といった観点をもつことの必要性などが指摘され、テーマ・構成の大幅な変更の必要性が生じた。これ以降、部屋では打ち合わせのたびにコンセプトや構成が検討され、最終的にはForeign Instructors（外国人教師）やOrigins（前史）など21のテーマとテーマごとの歴史的な解説、簡略な年譜、という構成となった。余談になるが、このような構成を反映して、「英文年譜」という史料室内での通称は「英文小史」となった。

「昌平学校」の英語表記は？

甘かったのはこれだけではなかった。翻訳のことである。

昌平学校の英語表記って？、大学南校って何て言うの？、司法省法学校は？、工芸学部や法政学部は？、臨時附属医学専門部は？等々機関名・固有名詞に関する素朴な疑問が次々にわいてきた。特に、前史や明治期の機関名・部局名についてはよくわからないものが多く、それらの特定が急務となった。

そこで、The University of Tokyo（英文概要）や戦前期までのUniversity Calendar（英文一覧）、国立教育研究所編『日本近代教育史に関する専門用語の英訳語基準化についての調査研究』などを調べてみることにした。

たとえば、大学南校は、英文一覧には“DAIGAKU NANKO”とあるのに対して、『調査研究』には“the Southern School of the University”や“Southern College (Nanko)”とある。南校だから“Southern”というのは安易な気もするが、そのことは別としても、

“Southern College”では、どのような学校かはイメージできないという問題がある。ほかに、東京農林学校は、“College of Agriculture and Dendrology”（英文一覧）に対して、“Agriculture and Forestry School”（英文概要）、“School of Agriculture and Forestry of Tokyo”（『調査研究』）とある。“school”と“college”とでは大きな違いがあるように思えるが、外国人の感覚ではどうなのだろうか。外国人向けということを考慮すると、このようなことを考える必要があった。

このように、機関名・固有名詞の英語化に関しては、統一的なものが示されていないだけではなく、その基盤整備さえ不十分なのが現状のようだ。そのため、英文年譜では、機関名・固有名詞に関しては、基本的にはローマ字で表記し、カッコを付して当時用いられた表記を付すことにした。

ちなみに、『調査研究』によれば、昌平学校は“the School of Chinese Studies”だそうだ。

Department、College、そしてFaculty

日本語では同じでも、英語では時代によって変化しているものもある。

たとえば、明治初期の東京大学時代、「学部」を表したのは“Department”だった。それが「分科大学」となると“College”が用いられている。その後、「分科大学」は再び「学部」となるが、英語呼称は“Faculty”となり、今日まで続いている。

手許にある英英辞典で“department”を引くと“any of important divisions or branches of a government, business, etc.”とある。どうやら機関の一部局というニュアンスが強いようだ。ちなみに、現在は、「学科」を表す語として“Department”を用いているようである。同様に、“college”は“a school for higher and professional education; part of university”であり、教育組織としてのニュアンスが強いようだ。また、“faculty”は“a natural power or ability, esp. of the mind / a branch or division of learning, esp. in a university”であり、研究者の集合体としてのニュアンスが強いといえよう。なお、今日、他の学部が“faculty”を用いているのに対して、教養学部だけが“college”を用いているが、これはその役割に関係しているのだろうか。

帝国大学と同時に設けられた東京大学予備門は“Preparatory School”であり、東京大学への進学予備機関であったことが如実に示されている。また、創設時に設けられた法理文三学部及び医学部の総理は“dean”ではなく“president”であった。現在は総長の意味で“president”が使われていることを考えると、

このような使用方法には、開成学校系統と医学校系統の縦割り体質が現れているようで興味深い。

学部の名称も時代とともに変化している。たとえば、“Department (College) of Literature”であった文学部は、帝国大学令の改正（1919年）を期に、“Faculty of Letters”と改称しているが、“literature”から“letters”への変化は何を意味するのだろうか。最近では、教養学部が“College of General Education”から“College of Arts and Sciences”へと改称している。これは大学設置基準の改定にともなうものなのだろうか。

このような英語呼称の変化は、内実とどのような関連があったのだろうか。また、当時の人は、英語呼称の変更にとどのような思いを込めたのだろうか。

話がそれてしまったが、英語呼称が時代によって変化している場合、原則として、今日用いられている呼称を採用し、歴史性を重視する時には、当時の呼称を用いることとした。

英語版・東京大学史に向けて

国際化・情報化の流れのなか、東京大学に関する情報は、時空を超えて広がっていくだろう。そのとき、国際化社会における情報発信者としての東京大学は、日本語だけの情報を流せば良いはずがない。すでに東京大学のホームページには英語版があり、学内諸機関には当然のように英語呼称がある。現在の情報の国際化（英語化）への対応は進んでいる。

しかし、今回、英文年譜の編集に携わって、東京大学に関する歴史的な情報が国際化・情報化の流れに乗り遅れてしまっているのではないかという感をもった。個人的には、東京大学に関する歴史情報の英語化への基盤整備を進めていく必要を強く感じている。「英文小史」は、そのための第一歩といえるかも知れない。

大島 宏（室員）

写真について

はじめに

当初、英文小史は和文年譜（以下「和文」）の英語版とする、という考えで、構成、写真などは基本的に変更しない予定になっていました。ところが、予備調査等を通して単なる「和文」の英語版ではすまないことに気づき、写真についても表紙を含め一から選定しなおす作業となりました。

ここでは、写真を中心に英文小史編集作業の一部を紹介します。

写真等の選定基準

英文小史の構成は、年譜を中心とした「和文」と異

なり、「外国の方々に東京大学を紹介する」という主旨が前提となったため、海外の大学で出版されている図録などを参考にして、まず、一目見て興味をひかれるような写真（お雇い外国人など、人物の写真を多く。）の使用を考えました。次に、21のテーマ別にそのページに合った写真を載せる、ビジュアル的にも優れている作品（特に戦後の項目については、プロの写真家が撮った写真）を探すことにしました。

その結果、「和文」からの転載も数点ありますが、今回新たに使用した史料がほとんどとなり、全体で107点となりました。（表1）

新しく採用した写真類

今回新たに採用した中で主となったのは、錦絵、絵葉書、プロの写真家が撮影した写真、です。

錦絵：「Origins」中の、「聖堂講釈の図」、「東京第一大学区開成学校開業式の図」*。

絵葉書：「Older Structure」の中の、関東大震災前に本郷キャンパス内にあった「工科大学」の建物、これまで史料でも見たことのなかった「八角講堂とその内部」*、また「The Higher Schools and University」の中で、旧制高校の授業風景、など貴重な図柄が載っている絵葉書。

写真：「The University of Tokyo and Literature」の中では、卒業生であり、外国の方でもなじみの深い（ノーベル文学賞受賞者など）森鷗外、夏目漱石、川端康成、大江健三郎4氏の写真を載せていますが、あえて、よく知られているような有名な写真は避け、それぞれの学生時代の写真を探して統一を図り、著名な文学作品表紙を横にあわせました。

プロの写真家の撮ったもの：表紙に使用した総合図書館内部と三四郎池の写真は、以前東大コレクションを特集していた「芸術新潮」から、「The War and the University」では学徒出陣壮行会の写真を共同通信社から、「The Student Movements」では、大学紛争当時の写真を、そのころに発行された写真集の中から2人のかたがそれぞれ撮ったものと朝日グラフに載った総長団交の写真で構成、また、東大の写真を多く撮っている鎌木宏司、師岡宏次両氏の作品も載せています。

そのほか、工部大学校時代に英文で書かれた学位記や、戦後最初に東大に入学した女子学生のお一人、藤田晴子さんからお借りした卒業証書*なども載せています。 ※表紙参照

写真等の収集

これらのほとんどが史料室以外で所蔵していて、学内、学外多くの機関にご協力いただきました。

学内では、図書館、史料編さん所、埋蔵文化財調査室などが初期のころに関連する写真類を所蔵してしま

た。最近の写真は、事務局や各学部、アルバム編集会（卒業アルバム用に撮りためた写真を所蔵）、古い建物に関しては工学部の建築学科などから借用しました。

また、カラーで目にとまりやすく日本的な絵も載せようと、東大が描かれている錦絵や浮世絵を調べるため、学外では文京ふるさと歴史館、江戸東京博物館、神奈川歴史博物館などに行き、閲覧して検索しました。

新聞社などが提供している、ホームページ上でも検索できる写真リストも見たり、さらに東大に関連する記事の載っている雑誌や書籍から写真をいくつか選び、出版社や新聞社から掲載許可を取って借用しました。（これらの機関からの借用にあたってはそれぞれ規定の料金がかかりました。）また、他大学で所蔵している史料も含まれています。今回新しい試みだった絵葉書は、切手や絵葉書を集められている卒業生からお借りしました。

収集の方法

プロの写真家が撮った写真を使用する場合、まず、作品の載っている書籍の出版元に連絡を取りました。中にはすでに出版社がなくなって連絡先がわからずインターネット上でお名前を検索して探し出したこともあります。そして出版社に承諾をとり、その後電話や文書で直接ご本人に交渉し、借用料を支払い、掲載しました。写真家協会に加入している方は協定があるらしく、料金も決まっています。（モノクロ、カラーの別、また、掲載目的によっても値段が違ふようです。）

史料室や学内で所蔵している、複写された史料を掲載する際は、原本を所蔵している機関を確認し、掲載許可願いを提出しました。

文学者の写真については、誰もが目にしている有名な写真は使わないようにしようと、伝記（「新潮日本文学アルバム」）やくわしい年譜などが載っている書籍から在学中の写真を探し、その出版社に問い合わせ写真所蔵者の連絡先を聞きました。また、ご本人で所蔵しているはず、といわれ問い合わせたところ原本がすぐ見つからず本から転載したり、編集者が所蔵している場合であってもご遺族の方にも許可が必要な場合などもありました。

学内から借用する際、特に形式がない場合は、「借用目的・期限・借用数」を記入した借用願いを提出しました。（期限を指定されない場合は、作業終了まで、としておけばよかったのですが、当初こちらで記載しておいた返却予定日に作業が終わらず新たに延長願いを出したこともありました。）

リストの作成

今回、貴重な史料を借用するにあたり、借用後史料室での保管、業者への引き渡しと返却確認、所蔵者へ

の返却および完成品の一部寄贈が終わるまでが作業の流れと考えました。借用期限を守る、史料を紛失しないようにすることを目的に、「どこから何を借りていて、いつまでに返す」のか、一目見てわかるようなリストを作りました。ただ作っただけではなくそれを目の届くところに貼っておかないと、期限などはつい忘れがちになり、全員の共通認識にならなかったように思います。

キャプションについて

21の小史はネイティブの方に翻訳をお願いし、写真のキャプションについては史料室スタッフで英文を考えました。本文同様、「近世の遺構」の説明や「バンカラ」といった、適切な英訳がなく日本語でもうまく説明できないものを訳すのは困難で、検討を繰り返し、専門の先生方や関係機関に問い合わせたりもしました。

全体として、1) 本文の中に写真の説明となる文章がある場合は同じ文章を入れず省略する、2) 古い写真については年代を入れる、3) 人の名前は、英語圏以外の人でも英語で表記する（例外もあり）、4) 日本名は日本語読みと同じ姓名の順で表記する、ことに統一しました。

提供者や撮影者の名前を入れる際に、撮影者に関してはPHOTOとわかっても、「所蔵」を示す表現はなかなか見あたらず、最終的にはOWNED BYで落ち着きました。また、所蔵者名を必ず記載するよう依頼されていても、英語の表記を確認した際「特に英語名はありません」と言われ、今回急遽考えて下さった機関もありました。

できあがって

実際にできあがったものを手にしてみてページをめくると、どの写真にも思い入れがあります。最初のページの写真は江戸時代のもの、そして最後のページが最近の東大を紹介する写真で終わっており、年表とあわせてめくるごとに年代が経過していきます。海外の方が東大や東大の歴史を知るきっかけの1つになれば、そして、読んだ方に1ページでも多く興味を持って見ていただければ嬉しいです。

末本千佳（室員）

(表1)

内容	所蔵場所			計
	学内	学外	史料室	
錦絵	1		1	2
絵葉書		9		9
写真	23	6	11	40
写真家(プロ)		11	1	12
その他(書籍から)	8	2	17	27
その他(複写したもの、地図)	2	3	7	12
その他(アルバム)より			5	5
合計	34	31	42	107

受贈図書一覧（平成11年9月～平成12年2月）

図説 判決原本の遺産 林屋礼二・石井紫郎・青山善充 平成10年12月	椋山女学園大学 平成11年11月
大学と学生 特集：平成11年度高等教育行政の展望 文部省高等教育局学生課編 平成11年4月	大学と産業界との研究協力事務必携 第三次改訂版 国立大学等外部資金取扱事務研究会 平成11年9月
千葉県文書館 第4号 千葉県文書館 平成11年3月	武蔵野美術大学六〇年史 1929-1990 武蔵野美術大学 平成3年7月
周恩来「十九歳の東京日記」 矢吹 晋 平成11年10月	橋本 治画集 橋本 治 平成3年11月
福島大学50年史 福島大学50年史刊行会 平成11年9月	学院史料 第17号 神戶女学院史料室 平成11年11月
Princeton University The First 250 years Princeton University 平成6年	太平洋戦争と慶應義塾 慶應義塾大学経済学部白井ゼミナール 平成11年10月
William Elliot Griffis Collection 1859-1928 Rutgers University Libraries Special Collections and University Archives 一宮の文化財めぐり 一宮博物館 平成11年3月	学術月報 第52巻 第10/11号 日本学術振興会 平成11年10月
「総合的な学習」の実践研究（中学校編）－当事者に 聞く 我が校の歩み－ 財団法人中央教育研究所 平成11年2月	千葉大学五十年史 千葉大学五十年史編集委員会 平成11年11月
成瀬記念館 NO.14 日本女子大学成瀬記念館 平成10年12月	関西東大会会報 VOL.15 1998 平成10年3月
学術センター年報 平成10年度 文部省学術情報センター 平成11年10月	関西東大会会報 VOL.16 1999 平成11年3月
学術月報 VOL.52 NO.9 日本学術振興会 平成11年9月	関西東大会広報委員会 埼玉大学五十年史 埼玉大学50年史編纂専門委員会 平成11年11月
近代科学再考 科学の社会史 近代日本の科学体制 日本資本主義と科学技術 昭和37年6月	東京外国語大学史 独立百周年（建学百二十六年）記念 東京外国語大学史編纂委員会 平成11年11月
広重 徹 東京大学物語－まだ君が若かったころ 中野 実 平成11年7月	大学改革と市場原理 第27回（1998年度）研究員集 会の記録 平成11年10月
拓殖大学百年史研究 3号 拓殖大学創立百年史編纂室 平成11年9月	受講生カルテによる授業への参加状況の把握と大学授 業研究－夏期夜間集中授業を対象として－ 平成11年11月
甦る日光・社寺を描いた水彩画 黒田清輝101年目の日光 東京国立近代美術館所蔵名品撰－風景の近代 小杉放菴記念日光美術館 平成11年10月	戦前・戦後高等教育機関の英語入試問題の分析 平成11年11月
京都大学百年史 資料編一 京都大学百年史編集委員会 平成11年9月	広島大学大学教育研究センター 時代に挑む 土屋齊の20世紀 岐阜新聞社編集局 平成11年12月
山形大学五十年誌 山形大学創立50周年記念誌発行実施委員会 平成11年10月	鹿児島女子大学二十年史 志學館大学（旧鹿児島女子大学） 平成11年11月
三田演説会と慶應義塾系演説会 松崎欣一 平成10年4月	金沢大学五十年史 部局編 金沢大学50年史編纂委員会 平成11年6月
文部省関係法人名鑑 平成八年度 （株）官庁通信社 平成8年10月	広島大学の50年 広島大学50年史編集室 平成11年11月
大学研究者専門別総索引 1958年 日本学術振興会 昭和33年3月	第一高等学校一覧（昭和16年～17年）卒業生氏名 第一高等学校 昭和16年10月
サティア＜あるがまま＞第36号 東洋大学井上円了記念学術センター 平成11年10月	一高同窓会会員名簿（昭和11年9月20日現在） 石川 剛 昭和11年10月
金沢市史 資料編18 絵図・地図 金沢市史編纂委員会 平成11年3月	哲学雑誌 第400号 大正9年6月
椋山女学園大学開学五十周年記念写真集	哲学雑誌 第404号 大正9年10月
	東京帝国大学文学部哲学研究室内哲学会 百華 第39号 財団法人新日本奨学会 平成11年12月
	一橋大学百二十年史 平成7年9月
	商業教育の曙 上巻 平成2年12月
	商業教育の曙 下巻 平成3年3月
	一橋大学学問史 昭和61年3月
	大正デモクラシーの開花期のころ 昭和58年3月
	一橋籠城事件（昭和6年10月） 昭和57年9月
	一橋大学学制史資料 第2巻 昭和57年11月

受贈図書一覧（平成11年9月～平成12年2月）

一橋大学学制史資料 第3巻	昭和58年3月	専修大学 1880-2000	
一橋大学学制史資料 第4巻	昭和58年7月	専修大学大学史資料室	平成11年12月
一橋大学学制史資料 第5巻	昭和57年7月	南山大学五十年史 写真集	
一橋大学学制史資料 第7巻	昭和58年9月	南山大学	平成11年10月
戦争の時代と一橋	平成1年3月	サティア<あるがまま>第37号	
一橋大学学園史資料室		東洋大学井上円了記念学術センター	平成12年1月
東京女学館物語		三木 清の生涯と思想	平成10年3月
学校法人東京女学館	平成10年11月	三木露風	平成9年4月
大学史に関する基礎的調査研究（報告書）		財団法人霞城館	
千葉昌弘	平成11年8月	東京女学館平成史 1989-1998	
「武蔵野美術大学六〇年史」への招待		東京女学館百年史資料室	平成11年12月
武蔵野美術大学大学史史料室	平成4年9月	学長選考問題FAQ	
日本学術会議五十年史		一橋大学教職員組合	平成10年10月
日本学術会議	平成11年3月		

史料室日誌抄録（平成11年11月～平成12年3月）

平成11年

11. 11 木 中野室員、全国大学史資料協議会東日本部会研究部会に参加（場所：東京工業大学）
11. 12 金 英文小史打合せ（その後、11/26, 12/7, 12/17, 12/22, 12/27, 1/4, 1/7, 1/11, 1/14, 1/21, 2/10, 2/18, 3/6, 3/7, 3/9, 3/10, 3/12, 3/13, 3/17）
12. 2 木 学研の写真史料室へ
12. 8 水 中野室員、名古屋大学、広島大学へ出張（～11日）
12. 24 金 東京都写真美術館へ
12. 28 火 大掃除

2. 22 火 第49回史料の保存委員会開催
2. 24 木 中野室員、旧制高等学校記念館（松本）へ出張
2. 29 火 評議会議事録（昭和38年～44年）15冊分マイクロフィルム化作業（～3/7）
3. 7 火 史料室のホームページを立ち上げる。
3. 14 火 総合図書館より書籍の引き取り
3. 16 木 全国大学史資料協議会東日本部会研究部会に中野室員報告（場所：東京大学）

この間の閲覧者数

学内 18名
学外 18名

平成12年

1. 13 木 韓国の釜山大学図書館大学史資料室のスタッフ7名が施設見学のため来室。
1. 14 金 中野室員、国立大学協会50周年記念行事準備委員会に専門委員として出席（ほか、1/24）
1. 17 月 第4回平賀文書研究会開催
1. 20 木 中野室員、全国大学史資料協議会東日本部会研究部会に参加（場所：明治大学）

主な学外閲覧者所属機関

ALO INTERNATIONAL INSTITUTE、朝日新聞社、東京女子大学、桜美林大学、東京外国語大学大学史資料室、釜山大学図書館大学史資料室、(株)プランニングコーツ、広島大学大学教育センター、宮内庁書陵部

文献撮影・文献複写許可数 3件
調査（照会）件数 26件

題字 森 巨元総長

東京大学史史料室ニュース 第24号

Archives Section of the University of Tokyo

発行日：2000年3月31日（年2回発行）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話：03(5841)2077(直)

印刷所：株式会社 芳文社

東京都新宿区新宿3-12-4